

ペトラルカと月桂冠

：世俗から宗教への意識の転換

飯 嶋 剛 将

0 はじめに

俗語抒情詩集『カンツォニエーレ』*Canzoniere*¹⁾で名高いフランチェスコ・ペトラルカ(1304-1374)は、イタリア・ルネサンス黎明期に活躍した詩人であり、文学・哲学・神学について多くの著作を残した。

ペトラルカはその文学的功績から1341年4月8日²⁾、ローマにて月桂冠を授かり、桂冠詩人の称号を得ることになる。この戴冠式という風習は古代ローマ以来³⁾廃れていたものであり、ペトラルカはその復活を導いた人物として、人文主義の先駆者たる宣言文を『戴冠式演説』*Collatio laureationis*⁴⁾にて表明した。

文字通り当代随一の詩人として認められたペトラルカは、その後文人としての栄光に満ちた人生を送ることになる。しかし、期待していた気高き生活はそこにはなく、他者からの嫉妬や憎悪に振り回されることになる。そして、次第にペトラルカは月桂冠への興味を失っていく。

本稿の目的は、ペトラルカが用いた「月桂冠 *laurea/laurus*」あるいはその素材となる「月桂樹 *laurea/laurus*」という単語に着目し、その使用例をもとに、月桂冠に対するペトラルカの態度の変化を明らかにすることである。最終的に、ペトラルカは時が経つにつれ、現世的名誉欲に囚われなくなっていくことを確認する。

これにより、ペトラルカの詩に関する活動の重心が変わることが明らかになる。具体的に言うならば、世俗的なものから宗教的なものへのベクトルの転換である。この関心の移り変わりは、ペトラルカの作品を読み解く上での重要な指針となる。たとえば、『悔悛詩篇』*Psalmi penitentiales*⁵⁾の執筆年代を考える上での鍵になるだろう。

本稿では、ペトラルカの証言として、『戴冠式演説』をはじめ、『韻文書簡集』*Epistole Metrice*⁶⁾、『わが秘密』*Secretum*⁷⁾、『牧歌』*Bucolicum carmen*⁸⁾、『親近書簡集』*Rerum familiarium libri*⁹⁾、『老年書簡集』*Rerum senilium libri*¹⁰⁾をもとに考察を行う。各作品の執筆年代には各々議論があるが、先行研究に準拠する形で論述を進める¹¹⁾。

なお、書簡集に関しては、全て自選のものであるため、後年に筆を入れた可能性も否めない。しかし、現在のペトラルカ研究においては、一部の書簡を除いて、その執筆年代に異議は示されていない。したがって本稿においては、あくまで通説に従う。

1 月桂冠への憧憬

1.1 戴冠式の一般的伝統

ペトラルカが追い求めていた戴冠式は、とりわけ古代ギリシャ・ローマ文化の中で成熟した。ペトラルカは、ラテン語しか読めなかったため、第1章ではローマ文化における戴冠式の伝統を紹介していきたい。

戴冠式で用いられる月桂冠は、皇帝や優れた詩人に与えられるものであった。例えば、皇帝に関して、スエトニウス『ローマ皇帝伝』などに月桂冠を身に纏った皇帝の姿が描かれている¹²⁾。

また、桂冠詩人の例に、アウグストゥスによって紀元前17年に開催の祭典にて桂冠詩人に選ばれたホラーティウスがいる。この機会にホラーティウスは『世紀の讃歌』を桂冠詩人として献呈した¹³⁾。

さらに、Wilkins (1951: 15-20) は戴冠式のモデルの一つとして、ドミティアヌス帝が行ったカンピドリオ丘のユピテル神に奉納するための競技会を挙げている。スエトニウスによると、この競技会は音楽・美術・体育の三部門の競技に分かれていたが、詩や弁論の技は音楽の部門で競われた¹⁴⁾。その競技会において優れた業績を上げたものが、戴冠される慣習があった。

1.2 月桂冠の定義

ペトラルカはこのようなかつての慣習を知った上で、月桂冠を追い求めた。ペトラルカ自身も『戴冠式演説』で月桂冠を次のように定義している。

月桂冠とはつまり、皇帝や詩人にふさわしいよう、月桂樹の小枝で編み込まれたものです。詩人のそれには、あるときには銀梅花が、あるときには西洋木蔦が、あるときには鉢巻だけが用いられます。¹⁵⁾

月桂冠は、詩人や皇帝¹⁶⁾ にふさわしいものであり、その素材が月桂樹 *laurus* や銀梅花 *mirtus* や西洋木蔦 *edera* が用いられるとされている¹⁷⁾。月桂樹はペトラルカにとって「詩人の栄誉」の象徴¹⁸⁾であり、希求の的であった。

またしばしば、ペトラルカの俗語作品において、月桂冠 *laurea* を連想させる名を持つラウラ *Laura* という女性が、愛する恋人として表現される。つまり詩人の栄誉——すなわち *laurea* を授かること——と永遠の恋人ラウラ *Laura*¹⁹⁾ への愛慕は重なっている。

1.3 戴冠の復活へ

「月桂冠の戴冠」という風習は優れた詩人や皇帝に与えられるものであったということを1.1で確認した。対象をラテン文学に限定して考えるならば、古代ローマでは先述のホラーティウスやスタティウスなどが戴冠された。すなわち戴冠は、詩人にとって「お墨付き」を高位の者たちから得ることであり、詩人に最高の栄誉が与えられる儀式であった。

スタティウス以降、この伝統は無くなってしまっていたので²⁰⁾、ペトラルカは、この風習を復活させたいと願っていた。実際、ペトラルカは複数の人物に対して戴冠式を復活させたいという願望を書簡に綴っている²¹⁾。

とはいえ、戴冠式実現に至るまでの過程を、ペトラルカはただならぬものであったと考えていた。というのも、ペトラルカはローマとパリの二つの都市から戴冠の申し出を受けたためである。このときの「驚き」をペトラルカは『親近書簡集』IV.4²²⁾において次のように述べている。

私は岐路に立っています。どこに向かうべきかわかりません。大層驚くべき話ではありますが、短い話です。今日、三の刻 [=午前九時ごろ] に、元老院から私にある書簡が届けられました。この書簡では、たいへん真剣な、多くの甘言と共に、私がローマの詩の月桂冠を受けるように勧められていました。これと全く同じ日、十の刻 [=午後四時] ごろに、パリ大学の教育総監ロベルト氏 [=ロベルト・デ・バルディ] の使者が、月桂冠についての書簡を携えて私のもとへやってきました。このロベルト氏は私と同郷の人物で、私と私のことについて好意を示してくれています。彼も入念な説明によってパリにて月桂冠を受け取るよう勧めたのです。[……] しかし、若者の心は徳よりも名誉を望むものでありますが、なぜ私は、アフリカの最強の王であるシュファクス王がかつてしたように、これが私にとっての榮譽であると考えてはいけなんでしょうか? というのも、あなた [=コロンナ枢機卿] は友として、自身に自惚れ、大胆になるよう私に勧めているのですから。シュファクス王は世界で最も強大な二つの都市である、ローマとカルタゴから同じ時に交友を求められたとされています。²³⁾

このペトラルカの「驚き」の理由を次のように考えることができる。それは、ローマとパリというヨーロッパの中でも大都市に分類される二つの都市から「同時に」戴冠の申し出を受けたことである。

実はペトラルカの前にも大都市ではなく地方では戴冠式が行われていた。たとえば、1315年にはパドヴァにおいてアルベルティーノ・ムッサート Albertino Mussato (1261-1329) が『エケリニス』*Ecerinis* という作品で評価され、戴冠された。この戴冠式はパドヴァのコムーネの議会によって取り決められたものであった。ペトラルカがこの式のことを知っていたかどうかはわからないが、どこかで聞いていた可能性は十分にある。というのも、ペトラルカは自身の著作『韻文書簡集』II. 10. 73-74において「パドヴァの月桂樹 *laurus Paduana*」という言及を残しており、おそらくムッサートのことを知っていたと思われる²⁴⁾。

また、『神曲』で有名なダンテに関しても、ボローニャにおいて戴冠式を執り行う動きがあった。しかし結局のところ、これは実現しなかった。この戴冠式を実現に導こうとした人物は、ペトラルカのボローニャ遊学期の師匠であるジョヴァンニ・デル・ヴィルジッリオ Giovanni del Virgilio (13-14世紀) であった²⁵⁾。なお、この人物は1319年にボローニャでムッサートと出会っており、幾らか会話を交わした経緯がある²⁶⁾。

このように、ペトラルカは戴冠式を行おうとする機運の中に身を置いていたことがわかる。そして、一部のごく小さな地域に限定した戴冠式ではなく、全ヨーロッパ的な規模の戴冠式を実現できるということにペトラルカは「驚く」のである。

最終的には、ペトラルカはローマで戴冠を受けることになる。これはおそらく、古代文化の中心地であった都「ローマ」を意識したためであろう。あるいは、ペトラルカの主家であるコロンナ家が、ローマの名門であったためであったということも考えられる。戴冠という風習そのものは先ほ

どから述べている通り——ペトラルカが言うには、ではあるが——長い間姿を消していた風習であった。それを復活させるきっかけをつくりだしたペトラルカの詩人としての自負は並々ならぬものであった。

この風習の復活について、ペトラルカは『親近書簡集』IV.7²⁷⁾において次のように書き記している。

あなた [=ナポリ王ロベル] は、ローマの都とカンピドーリオの廃れた神殿を、思いがけない喜びと見慣れない枝葉で飾ったのです。「些細なことだ」とおそらく誰かが言うでしょう。しかし、疑いなく、注目をひく新しさ、ローマの人民の喝采と人気によって、あなたは中断されていた月桂冠の慣習を十分に広めたのです。この慣習は何世紀にもわたって中断されていただけでなく、すでにその状態で、忘れられたままになっていました。他の異なる様々な関心ごとや一般における研究が繁栄したゆえです。またこの慣習は、あなたを将軍として、私を兵士として、私たちの時代において一新されました。イタリアにも外国にも、極めて卓越した才能がいたことを私は知っています。この才能を、この試みに関する長きにわたる荒廢の全てが、また、物事に対して常に疑わしくある新しさが、妨げてしまっていたのです。私を先頭にして危険を犯した後ですから、すぐに才能は続き、熱意において鎬を削り、ローマの月桂樹を摘み取ることができるかと私は確信しています。²⁸⁾

ペトラルカはロベルを戴冠式の復活に力添えをしたくれた人物——故にペトラルカは彼のことを「将軍」と、自身のことを「兵士」と呼んでいる——として賞賛する。ロベルはいわばペトラルカの理解者であった。

何世紀にもわたる他のさまざまな関心ごとや一般における研究とは、大学を本拠とするスコラ学のことだろう。ペトラルカは人文主義者としてこのような学問を否定していた²⁹⁾。このような時代の趨勢により戴冠式という慣習が廃れてしまったのだとペトラルカは考える。

ペトラルカが切望していたのは、月桂冠の慣習の復活である。この習わしは優れた人物を讃えるものであった。そして、ペトラルカは桂冠詩人として同時代における唯一者となった。言い換えるならば、月桂冠 laurea に対する思いの現実化である。これはペトラルカの生涯にとって最も衝撃的な出来事であったと考えられる。

ペトラルカは月桂冠によってローマのカンピドーリオを飾ることとなった。この戴冠の復活こそがローマ文化の再興を巻き起こすものであった。文芸復興の先駆者たる文人ペトラルカはこれを強く意識していたことだろう。

1.4 古代ローマの再興としての月桂冠

ペトラルカは『戴冠式演説』において戴冠に対する熱い思いを語っている。特に先ほどから述べているように、ペトラルカは月桂冠が「ローマ文化の再興の象徴」であると考えていた。ペトラルカはその象徴たる月桂冠を手に入れるまでの「心労」を『戴冠式演説』において次のように表現している。

それゆえ、誰かはこのように言うことでしょうか。「友よ、いったい何があるのだ？運命が君に対立し、反抗しているその時に、君はあの慣習を再興させようと決心したのかね？この慣習とは、生来的な困難によって覆われ、かなりの昔に時間の流れによって廃されたものだ。ローマのカンピドリオを新奇かつ異例な葉冠によって飾りあげるというその君の大層な自信はどこからやってくるのだ？どれほどの心労を耐えることになるのか君にはわからないのか？この心労とは、パルナソスの人気のない険しい道を通して、ムーサたちの近づき難い森を登っていくことだ」と。³⁰⁾

ペトラルカは月桂冠を求めることを「運命と対立すること」と表現する。この「運命」とはペトラルカがしばしば用いる単語で、「逃れることのできない定め」のことを指し示す。しかし、ペトラルカはその「定め」を退け月桂冠を手にするのである。また、常套句として用いられている「廃れてしまっている戴冠式という慣習」を復活させることをペトラルカは、「新奇かつ異例な枝葉によって飾りあげること」と表現している。この表現から分かる通り、ローマでの戴冠がただならぬものであったというペトラルカの考えがうかがえる。実際、ペトラルカはここで「偉大な詩人にして歴史家 *grande poeta e storico*」として桂冠を受けることになる³¹⁾が、これによってペトラルカは社会的に大きな後ろ盾を得ることになった。

そして、ペトラルカは戴冠という試みをローマで受けたこと、戴冠式が長く廃れていたことについて『戴冠式演説』において次のようなコメントを残している。

このローマの都市——キケロは「あらゆる土地の要塞」と言います——で、今私たちが立っているこの場所、ローマのカンピドリオにおいて、私があることを復活させているその時に、何よりもまず、数多くの偉大なる詩人が優れた価値のある月桂冠を貰い受けたことに私は慄くのです。この詩人たちは優れた叡智の頂点へと辿り着いたのです。実際、今や、その習わしは中断されただけでなく、放棄されたのです。いや、放棄されたというよりはありえぬ奇跡へと変わったのです。³²⁾

ペトラルカは古代ローマの弁論家キケロを引用しつつ、「ローマ」という場所の重要性を説いている。ローマは彼にとって憧れの対象であった。そして、ペトラルカは自分がその古代ローマからの文化の系譜に入ることができたことを誇りに感じている。この系譜とは、1.2で確認した通りのものである。

ペトラルカは繰り返し、自身が栄誉ある先人たちに続いたことを強調する。これは、ペトラルカの詩人としてのアイデンティティを形成する上での重要な位置を占めている。このようにして、ペトラルカの月桂冠に対する憧れは果たされるのである。

2 憧憬の陰り

2.1 『牧歌』第十歌と月桂冠の死

ペトラルカは文人としての詩的榮譽、すなわち月桂冠を手に入れた。しかし、ペトラルカの月桂冠に対する意識は後年になって変わっていく。言い換えれば、月桂冠に対する意識の変化がみられる。ここでまず、戴冠7年後の1348年に執筆された『牧歌』第十歌の記述を見てみたい。

ここから、私に最初の名譽が、甘美なる労苦が、喜ばしい閑暇が、
 牧人たちの大層な好意が私のところにやってきた。
 すぐにあらゆる丘々で、私は知られ始め、指さされるようになったのだ。 375
 月桂冠は私に名前を、月桂冠は私に名声を、
 月桂冠は富を与えてくれた。私は野原では貧しかったが、
 森の中では裕福であった。私より幸福な者は他に誰もいなかった。
 しかし、運命は私の幸福を敵対的な目で見ていた。
 たまたま、私が離れ、古の森に立ち入っていたその時、 380
 悪疫をもたらす、一方では東風が、
 他方では湿った南風が猛威を振るった。
 そして、辺りの木をなぎ倒し、私の喜びである月桂樹を根こそぎ倒し、
 残酷にもそれを押し潰し、その枝と緑の葉を地下の洞窟に隠してしまった。³³⁾

この詩行は大きく二部に分かれている。まず、前半部では月桂冠がもたらした数々の恩恵が挙げられている。具体的には、名前・名声・富である。この「名前」は「桂冠詩人 poeta laureatus」という名前のことである。これら三つが詩的榮光のことを示していることは明らかである。「牧人たちの好意」とは人気のことを、「野原」は世俗世界のことを、「森」は詩の創作をする場所を指している。このような環境のことをペトラルカは「幸福」と形容する。

一方、逆接の「しかし」を境に、後半部ではその「幸福な」環境の崩壊が描かれる。ペトラルカが「古の森に立ち入っていた」間、すなわち古典研究に身を捧げていた間に、悪疫をもたらす「風」が月桂樹を死へと追いやってしまう。この悪疫をもたらす「風」、東風と南風は、1348年に大流行したペストのことを指す³⁴⁾。事実、ペトラルカはペストが流行していた際、自身の拠点であるヴォークリューズ（アヴィニョン近郊の田舎）からはなれ、イタリアのパルマに滞在していた。このパルマにて、ラウラが亡くなったことを親友の通称ソクラテスから聞くのである。ここでペトラルカのラウロ lauro（月桂樹）は消滅する。

2.2 月桂樹の死

1348年のペストに関連した月桂樹の死はペトラルカの作品内で広く用いられるモチーフである。例えば、『カンツォニエーレ』296番のソネットでは次のような表現がなされている。

高き柱が、緑の月桂樹が、倒れた。

私の疲れた思索に影を与えてくれたあの二つが。
北の風から南の風まで、インド洋からモロッコの沖まで、
再び見つけることを望めないものを私は失ってしまった。 4

死よ、お前は私から二つの宝物を奪い去った。
この宝物は、私を喜ばしく生かし、堂々と闊歩させていた。
また、領地も、帝国も、東方の宝玉も、
ありったけの金も、私の宝物に代わることはない。 8

けれども、これが運命によるものなのであれば、
これ以上、私は他に何ができるといえるのだろうか？
心を陰鬱にさせ、常に目を濡らし、顔を俯かせる以外に。 11

見かけではあれほどに美しい私たちの生よ、
何年も大層苦勞をして手に入れたものが、
ある日、なんと簡単に消えてしまうことだろうか。³⁵⁾ 14

このソネットで死んだとされるのは、柱と月桂樹である。この「柱 *colonna*」はペトラルカの友人であり、主家であり、枢機卿であったジョヴァンニ・コロナ Giovanni Colonna (1295-1348) を指し、「月桂樹」はラウラのことを指し示している³⁶⁾。コロナもラウラと同様、1348年のペストによって亡くなった人物であり、このソネットもコロナの死に際して捧げられたものである³⁷⁾。

1348年のペスト以降、「月桂樹の死」、すなわち「月桂樹の喪失」があるひとつのテーマとして用いられるようになる³⁸⁾。このテーマは、1348年に執筆された『牧歌』第十歌と呼応関係があると言えよう (2.1 参照)。ここでは月桂樹の生死が重要になってくるのである。

2.3 月桂樹の移行

ペストによって月桂樹の死、つまり月桂冠の死がもたらされた。この死は、月桂樹が命ある段階から次なる死の段階へ移行したことを指し示す。ペトラルカはこの「月桂樹の死」を『牧歌』第十歌の先の引用の後の箇所において次のように解釈する。

むしろ私は別の理由を考えている。涙と嘆きは勘弁してくれ。
苦しみとは饒舌なものだ。東風でもなく、南風でもなく、
天上の神々が聖なる月桂樹を奪い去ったのだ。 400
幸福な土地へと移植するために。
樹皮が落ちてしまった部分は滅びてしまったが、実はまだ生きている。
むしろ、これは根を張り、新芽によってエーリュシオンの野原を豊かにしているのだ。³⁹⁾

ペストの猛威によって死んでしまった月桂樹は神々によって奪い取られたとペトラルカは解釈す

る。その行先はエーリュシオンの野原、つまり天国である⁴⁰⁾。すなわち、月桂樹はその死によって、地上的な生から天上的な生へと移行したと言ってよいだろう。Martellotti (1968 : 84) はこの箇所について、「ラウラの身体だけが死んだのである。彼女は永遠の輝きの中に生きているのである」と解釈している⁴¹⁾。つまり、『牧歌』第十歌は、月桂冠（月桂樹）が地上で死に、天で生きる、その移行を描いているのである。

2.4 月桂樹からイチジクの木へ

この移行によってペトラルカは、重要視する植物を変えていく。具体的には、もはや月桂樹ではなくイチジクの木が語られる。これは、ペトラルカが地上にむけていた視線を天上へ向けるようになったことを指す。

そのためにはまず、視線を天に向ける前段階として地上的な存在である月桂冠からの離別が必要である。ペトラルカはその「離別」を『わが秘密』において次のように表現している。

銀梅花や木蔦、アポロンに愛されたという月桂冠よりも、君 [= 主人公フランチェスコ] の心には、あのイチジクの木を想起することが必要なのだ。詩人は皆この月桂樹に惹きつけられ、他の詩人の中で、君の世代で、君だけが枝葉で編まれた冠を得ることができたのだけれども。この想起によって、これほど多くの嵐の後に君の心が港に戻るその時に、君には、悔い改めと免罪に対する確かな希望がもたらされる。⁴²⁾

ここでのイチジクの木とは、主人公のフランチェスコの対話相手であるアウグスティヌスが回心する際にそばにあった木である⁴³⁾。この木は、すなわち、キリスト教世界では一般に悔い改めの象徴である。この対象の移行は世俗的なものから宗教的なものへの意識の転換を意味している。そして、ペトラルカは月桂冠からイチジクの木へとその興味を変えていく。例えば、1352年ごろに書かれた『医者反駁』 *Invecta contra medicum*⁴⁴⁾ には次のような言及が見られる。

ロバは獅子よりも、雌鳥は鷲よりも、より一層重要なのです。ゆえに、より高貴なのです。イチジクの木は月桂樹よりも、石臼は碧玉よりも、より一層重要なのです。ゆえに、より高貴なのです。⁴⁵⁾

ここでは月桂樹とイチジクの木の比較対照が行われている。一見すると、「より高貴なもの」は逆のものではないかと思えるが、ペトラルカはイチジクの木をより高貴なものとして定義している。他に比較されているものと対照させてみると、「より恩恵をもたらすものが高貴である」という選択をしていると読み取れる。

ここで月桂樹からの離別と、イチジクの木への転換が生じる。このイチジクの木への転換があったのは、『牧歌』第十歌の執筆年である1348年から、『医者反駁』が書かれた1352年の間であろう。また、先に述べた『わが秘密』の成立年代が1347年から1353年の間である⁴⁶⁾ ことから、転換点がこの時期にあたるといえる。

3 憧憬の終焉

3.1 月桂冠がもたらしたもの

文人にとって詩的榮譽を意味する月桂冠⁴⁷⁾は地上に残されたペトラルカ自身に恩恵をもたらすことがなくなってしまう。なぜなら、他者からの羨望や噂を月桂冠がもたらしたためである⁴⁸⁾。

そのため、ペトラルカは戴冠という行為、月桂冠を受け取ることが「時期尚早」であったと感じるようになる。これもまた、1348年以降のペトラルカ作品における一種の定型表現である。

例えば、俗語叙事詩である『愛の凱旋』 *Trionfi Cupidinis*⁴⁹⁾において、次のように描かれる。

彼らたちと主に、私はその榮譽に満ちた枝葉を摘み取った。

この枝葉によって、私は時期尚早に額を飾ったのだ。

私が大層愛したあの女性を記念して。⁵⁰⁾

ここでは、月桂冠の材料である月桂樹への愛について書かれている。ここでの「榮譽に満ちた枝葉」は月桂樹のことを指し、「大層愛したあの女性」はラウラのことを示している。

また、1349年の書簡（『親近書簡集』XⅢ.7⁵¹⁾）にも「時期尚早」という表現が用いられている。

私は恐れています。私の月桂樹の未熟な枝から、あの葉が熱心に摘み取られ、その葉が、真なる夢を与えるとされているけれども、私や多くの人に偽りの不眠を与えたのではないかと。この夢は、秋の夜の間に象牙の敷居から送り出されるのです。しかし、これで良いのです。私は、自身の罪の罰を受けているのです。というのも、私は家の中で苛立ち、あえて公に出るということを最早することがないのですから。⁵²⁾

ペトラルカは未熟な月桂樹から葉を摘み取ったことを後悔している。月桂樹が真なる夢を与えるというのは、一般的な言い伝えであり、ペトラルカもその伝承を『戴冠式演説』にて紹介していた⁵³⁾。また、秋の夜に象牙の敷居から送り出される夢は偽りの夢であることも一般的に信じられていた⁵⁴⁾。また、「家の中から出ず、公に出ることをしない」のは、ペトラルカが「指さされること」⁵⁵⁾を避けたためであろう。また、ペトラルカのある書簡によると、スコラ学者が突然家に現れ、ペトラルカに議論を強要するといった事例があり⁵⁶⁾、ペトラルカはこのような事態に大層憤りを感じていた。つまり、ペトラルカ作品の受容者による妄言や噂などによって翻弄されることがペトラルカに対する罰であり、ペトラルカもそれを受け入れている。この「罰」こそ、月桂冠を受け取ったことの代償である。

こうして、ペトラルカは戴冠による詩的榮譽を厭わしく感じるようになる。つまり、地上での栄光に希望が持てなくなる。なぜなら、常に批判に晒され、自分の意図とは違う文脈で作品を解釈される、いわば曲解されるようになっていたためである⁵⁷⁾。

ここで既に、月桂冠からの離別が始まっている。この書簡が書かれたのは1349年であり、1348年以降の月桂冠に対する心境変化の途中にあることは言うまでもない。ペトラルカは1348年以降、時が進むにつれて月桂冠に対する興味を失う。

3.2 月桂冠を追い求めるという「狂乱」状態

ペトラルカは、月桂冠を授かるべきではなかったという考えから、自身の過去を省みる。そして、月桂冠を追い求めていたことを「狂乱」状態にあったと考えるようになる。

例えば、『わが秘密』において、アウグスティヌスは、月桂冠を追い求めていた「君」、すなわち主人公フランチェスコの「狂乱」状態を指摘し、こう言い放つ。

君のあらゆる狂乱の最たるものを取り上げて、幾らか前に私が脅しておいたことを実行することにしよう。一体誰が相応十分に忌み嫌うだろうか？一体誰が発狂した心の、この狂気に驚くだろうか？君は、彼女の肉体的美しさと同様に、その名前に魅了され、信じられないほどの虚栄心によって、それと同じ音がするもの全てを崇めるようになったのだから。そのため君は、皇帝の、あるいは詩人の月桂冠を、同じ名前であるという理由から、大層熱心に愛し求めたのだ。その時から君は、必ず月桂樹に言及した詩を公にした。まるで、ペネウスの住人かキッラの神官のようであった。結局皇帝の月桂冠を望むことはできなかったので、君の熱意に対する功労が君に約束をしてくれる、詩人の月桂冠を熱望したのだ。貴婦人を愛するのと変わらぬほどに。月桂冠を獲得するために、才能の翼に助けられたとはいえ、どれほど労苦を共にしたことか。これを思い起こした君は震え上がることだろう。⁵⁸⁾

ここで示されているのは月桂冠（あるいはラウラ）を並はずれて欲する心である。その名前は地上的なものに結び付けられており、その名に類するものは皆、否定されている。もちろんその名に言及した詩——ここでは俗語恋愛詩のことだろうか——も否定され、その詩作に対する「労苦」も否定される（14、21参照）。

そして、ここでは月桂冠を追い求めていたことが「狂乱」と表現される。つまり、過去の自分、戴冠式に憧れを持ち、月桂冠を求めていた過去の自分をペトラルカは断罪している。こうして月桂冠との訣別を果たすのである。

3.3 晩年の回想

さらに、ペトラルカはこの月桂冠が自分自身にどのような影響を与えていたのか晩年に回想している。1373年に書いたボッカッチョ宛書簡（『老年書簡集』XVII, 2⁵⁹⁾）がそれである。この回想で、月桂冠は次のように想起されている。

認めましょう、あの月桂冠は年齢も心もまだ未熟だった私に与えられました。この月桂冠はあまりにも若い枝葉で編まれていたのです。もし私がもう少し成熟していたのなら、月桂冠を望みはしなかったでしょう。確かに、老人が有益なものを愛する一方で、若者は見かけ騙しのものを愛するものです。そして若者は結末を考えません。さて、あなたは何をお考えでしょうか？あの月桂冠は、私に対し、何の学識も雄弁も与えてはくれず、ただ果てしのない嫉妬をもたらし、平穩を奪い去ったのです。このようにして、虚しい名誉と若き傲慢の罰を私は受けたのです。[……] 要するに、私の月桂冠は次のことを与えてくれたのです。それは、人々に知られ、耐えず悩まされることです。この月桂冠さえなければ、人生の最良の種類と考えられて

いること、つまり平穩に過ごすことと、世に知られずに生きることができたでしょう。⁶⁰⁾

3.1で確認したように、ペトラルカは未熟な自分に月桂冠が与えられたとしている。さらに、もし、自分が適切な判断ができるほど成熟していたのなら、月桂冠を望まなかったとさえ言っている。すなわち、月桂冠は詩人が幸福に生きる上で、有益なもの *utilia* ではなく、見掛け倒しのものなのであるとペトラルカは考える。ペトラルカにこの月桂冠が与えたものは、嫉妬や虚しき名誉であり、学識や雄弁や平穩を与えることはなかった。これをペトラルカは、自身の傲慢に向けられた罰とする。そして、ペトラルカは平穩に過ごすことを月桂冠によって妨げられるのである。

最終的にペトラルカは月桂冠を不必要なものであるとの結論を下す。あれほど憧れ、自身に栄光をもたらしたものを、ペトラルカは放棄するのである。

4 まとめ

戴冠式の前後にはペトラルカの月桂冠に対する特別な思いがあったことを確認した。長く廃れていた慣習の復活は、ペトラルカを名実ともに詩人の地位を引き上げた出来事であった。その喜びはペトラルカの書簡群を読み解くと明らかかなものであると言える。しかし、この喜びは長続きしないものであった。

ペトラルカの月桂冠に対する態度の変化は段階的であり、その変化は大きく二つに分類できる。

第一に、世間一般からの噂や曲解によるペトラルカの憤りである。この憤りに関してはこれまで確認してきたように、さまざまな場所でペトラルカはそれを表明していた。戴冠された以後、ペトラルカの月桂冠に対する態度の変化——月桂冠を受け取らなければよかったという思い——があったと言って良いだろう。これは年を追うごとに強くなっていった考えである。

第二に、ペストによる宗教的意識の興隆である。ペストの猛威によって、ペトラルカは多くの友人、そして永遠の恋人ラウラを失った。死を目の当たりにしたペトラルカはこれによって深く宗教に傾倒していく。意識を宗教に向けるというモチーフはペスト後の詩作に如実に反映される⁶¹⁾。ペトラルカの心性の変化がこの年にあることは間違いないと言えるだろう。また、ペトラルカの関心が1348年以降、地上的なものから天上的なものへと向かう。若い時から熱望していた月桂樹からアウグスティヌスに関係したイチジクの木へ羨望の対象を変えることは、悔い改めの意識、すなわち宗教的意識の芽生えがこの時期にあったと言える。

以上のような二つの段階を精査すると、1348年にペトラルカの中で大きな変化が生じたことは明らかである。

本稿ではペトラルカの思想・詩作モチーフの変化が1348年にあることを確認した。この「ある転換点」はペトラルカの作品群を読み解く上での大きな指針となるだろう。特に、同時期に執筆されたとされる『悔俊詩篇』研究において、この意識の変化がその執筆動機と大きな関わりを持つことを示していきたい。

参考文献

<テキスト>

Petrarca

- 『愛の凱旋』 *TC*. Francesco Petrarca, *Trionfi, rime estravaganti, codice degli abbozzi*, a cura di V. Pacca e L. Paolino, introduzione di M. Santagata, Milano, A. Mondadori, 1996.
- 『医者反駁』 *Inv. med.* Francesco Petrarca, *Invective contra medicum. Invectiva contra quendam magni status hominem sed nullius scientie aut virtutis*, a cura di F. Bausi, Firenze, Le Lettere, 2005.
- 『韻文書簡集』 *Ep. metr. Epistulae metricae; Briefe in Versen*, herausgegeben, übersetzt und erläutert von O. Schönberger, und Eva Schönberger, Würzburg, Königshausen & Neumann, 2004.
- 『カンツォニエーレ』 *RVF.* Francesco Petrarca, *Rerum vulgarium fragmenta*, edizione critica di G. Savoca, Firenze, Leo S. Olschki, 2008.
- RVF.*, Sant. Francesco Petrarca, *Canzoniere*, edizione commentata a cura di M. Santagata. Nuova edizione aggiornata, Milano, Arnaldo Mondadori, 1996.
- 『親近書簡集』 *Fam.* Francesco Petrarca, *Le familiari*, a cura di V. Rossi, Firenze, G.C. Sansoni, 4v., 1968.
- 『戴冠式演説』 *Coll. laur. Opere latine di Francesco Petrarca*, a cura di A. Bufano, con la collaborazione di B. Aracri e C. Kraus Reggiani, introduzione di M. Pastore Stocchi, Milano, UTET, 1975.
- 『牧歌』 *BC.* Francesco Petrarca, *Petrarch's Bucolicum carmen*, translated and annotated by T. G. Bergin; with ill. by D. Keller, New Haven, Yale University Press, 1974.
- BC.*, Pell. Francesco Petrarca, *Bucolicum carmen*, a cura di L. Canali, collaborazione e note di M. Pellegrini, Lecce, Manni, 2005.
- 『老年書簡集』 *Sen. Res seniles*, a cura di S. Rizzo, con la collaborazione di M. Berté, Firenze, Le lettere, vol. 4, 2017.
- 『わが秘密』 *Secr.* Francesco Petrarca, *My secret book*, edited and translated by N. Mann, Cambridge, Harvard University Press, 2016.

<引用参考文献>

Albanese, G.

2014 *Convivio; Monarchia; Epistole; Egloge*, a cura di Gianfranco Fioravanti ... [et al.], Milano, Mondadori.

Antognini, R.

2008 *Il progetto autobiografico delle Familiare di Petrarca*, Milano, Edizioni Universitarie di Lettere Economia Diritto.

Dotti, U.

1987 *Vita di Petrarca*, a cura di U. Dotti, Roma-Bari, Laterza.2000 Francesco Petrarca, *Secretum*, a cura di U. Dotti, Milano, Rizzoli.2010 Francesco Petrarca, *Le senili*, vol. III, testo critico di Elvira Nota, traduzione e cura di Ugo Dotti, collaborazione di Felicita Audisio, Torino, Aragno.2014 *Vita di Petrarca: il poeta, lo storico, l'umanista*, Torino, Aragno.

Feo, M.

1975 *Il sogno di Cerere e la morte del lauro petrarchesco*, in «Il Petrarca ad Arquà», Atti del Convegno di studi nel VI centenario (1370-1374), 117-148.

Godi, C.

1970 *La "Collatio laureationis" del Petrarca*, in «Italia medioevale e umanistica», vol. 13, 1-27.

Marcozzi, L.

2022 La cerimonia della laurea capitolina tra storia, leggenda e iconografia, in «Petrarchesca : rivista internazionale», 10.

Martellotti, G.

1968 Francesco Petrarca, *Laurea occidens, testo*, traduzione e commento a cura di G. Martellotti, Roma, Edizioni di storia e letteratura.

Rico, F.

1974 *Lectura del Secretum*, Padova, Antenore.

Santagata, M.

- 2004 *I frammenti dell'anima: storia e racconto nel Canzoniere di Petrarca*, Bologna, il Mulino.
Wilkins, E. H.
- 1951 *The making of the "Canzoniere" and other Petrarchan studies*, Roma, Edizioni di storia e letteratura
近藤恒一
- 1989 ペトラルカ [著]・近藤恒一 [編訳] 『ルネサンス書簡集』東京、岩波書店。
林和宏
- 2005 「ペトラルカ『カンツォニエーレ』における夢の中の回心」『東京外国語大学論集』70号、49-59頁。
藤井昇
- 1984 ホラーティウス [著]・藤井昇 [訳] 『歌章』東京、現代思潮社。

注

- 1) ペトラルカ作品で最も有名な俗語抒情詩集。366編の詩から成り立ち、その多くが恋愛詩となっている。それら恋愛詩においては、ラテン語の月桂冠 *laurea* を語源にもつラウラ *Laura* という名前の女性に愛を語るものがほとんどである。ペトラルカ作品の中ではかなり早い段階から着手されており、何稿にもわたって加筆修正されている。
- 2) この日付に関しては議論があるが、本論の論旨には関係ないため省略する。日付の問題に関しては、Godi (1970: 1-7) や Dotti (1987: 86-87n) を参照されたい。なお、Marcozzi (2022) の研究は、以前のすべての説を列挙しているため非常に有益である。
- 3) 通説ではラテン詩人スタティウス (45-96) 以後、戴冠式は行われてこなかったと言われる。
- 4) 『戴冠式演説』は1341年4月にペトラルカが行った演説である。ペトラルカは、月桂冠と該当詩人に関する歴史を説明しながら、自身の妥当性を説いている。
- 5) 『悔悛詩篇』は一般的に1347-1348年に書かれたとされる作品である。文体は散文詩で書かれており、作品の規模は小さい。いわゆる小品である。しかし、ペトラルカの宗教的意識が端的に表明されており、彼の思想を読み解く上で重要な作品であると言えよう。筆者はこの作品を重要視し、別稿で執筆年代の問題と内容の検討を行うつもりである。
- 6) ペトラルカによる韻文の自選書簡集。成立は早く、1331年から1351年の間に書かれた。ペトラルカ初期の証言を残している貴重な史料である。
- 7) 1347年から1353年の間に書かれた対話篇。聖アウグスティヌスと主人公フランチェスコの仮想ダイアログである。自身に対する深い精神的考察がなされていることから、ペトラルカの哲学研究において最も重要視されている書物の一つである。
- 8) 『牧歌』は全12歌からなるラテン語詩集である。この作品は1345-1347年に着手された。1348年のペストを動機として書かれた9、10、11歌は「嘆きの歌」と一般的に称されており、ペスト期の心性を読み取る上で重要な史料となっている。
- 9) 『親近書簡集』は、1345年から1366年ごろにかけて執筆された書簡を、ペトラルカが書簡文学作品として再構成したものである。全24巻である。道徳的、宗教的テーマが作品の根幹をなしている。
- 10) 『老年書簡集』は『親近書簡集』同様、1361年ごろから1374年にかけてペトラルカが自身の書簡に手を入れ、一冊の書物としてまとめた作品である。全17巻である。老年や死が作品のテーマをなしている。
- 11) 『戴冠式演説』に関しては Godi (1970) を、『わが秘密』に関しては Rico (1974) を、『牧歌』に関しては Martellotti (1968) を、『親近書簡集』に関しては Antognini (2008) を、『老年書簡集』に関しては Dotti (2010) を執筆年代の先行研究として据えた。
- 12) Cfr. Suet. *De gest. Caes.* III. 17. 2.
- 13) Cfr. 藤井(1984: 216-217).
- 14) Cfr. Suet. *De gest. Caes.* VIII. 4.
- 15) *Coll. laur.* 11. 1: «Laurea igitur, et cesaribus et poetis debita, est sertum ex frondibus laureis intextum, licet poeticum illud interdum ex mirto, interdum ex edera feret, interdum ex vitta simplici feret».
- 16) ペトラルカは皇帝の位とは無縁であるため、詩人の月桂冠を欲したと『わが秘密』において書いている。cfr. *Secr.* III. 7. 5: «Denique quia cesaream sperare fas non erat, lauream poeticam, quam studiorum tuorum tibi meritum promittebat, nichilo modestius quam dominam ipsam adamaveras concupisti» (結局皇帝の月桂冠を望むことはできなかったので、君 [= 主人公フランチェスコ] の熱意に対する功労が君に約束してくれる、詩人の月桂冠を熱望したのだ。貴婦人を愛するのと変わらぬほどに)。
- 17) ペトラルカは月桂樹の素材を、次の『韻文書簡集』にあるように、しばしば三種類並列する。cfr. *Ep. metr.* II.

10. 20-21: «Nunc tamen et lauri mirtusque hedereque silentur,/ sacraque temporibus debita vitta tuis» (しかし今は月桂樹も銀梅花も西洋木蔦も、あなたの時代に相応しい神聖な帯も黙される)。
- 18) Santagata (2004 : 135) は次のように言っている。「月桂樹の樹木は、王冠状に編まれると、詩と文学的榮譽の象徴とされる」(«la pianta di lauro, se intrecciata in corona, è simbolo della poesia e della gloria letteraria»)。
- 19) ペトラルカの永遠の恋人ラウラとの出会いは、1337年の4月6日、アヴィニョンでのことであった。ペトラルカはラウラという女性を詩的源泉として恋愛詩を書くようになる。ラウラについては Dotti (2014 : 68-74) に詳しく述べられている。
- 20) ペトラルカの同時代では、スタティウスが最後の桂冠詩人だと考えられていた。しかし、スタティウスを最後とする説を、Wilkins (1951 : 15-20) は詳細な調査を重ねたものの、証明できなかった。
- 21) 1336年の『親近書簡集』II. 9. 18や、IV. 6. 5などにその記述が見られる。なお、Dotti (1987 : 78) は、ペトラルカが親しくしていたディオニジ・ダ・ボルゴ・サン・セポルクロ Dionigi da Borgo S. Sepolcro がローマの戴冠式の仲立ちをしたのではないかと書いている。
- 22) ペトラルカの主家のジョヴァンニ・コロナ Giovanni Colonna 枢機卿宛書簡。1340年9月1日に書かれた。この書簡はローマとパリの二都市から同時に戴冠の知らせを受けたペトラルカが、主家に直接相談を持ち掛けたものである。コロナはペトラルカがローマにて戴冠されることを受諾する。
- 23) *Fam.* 4. 4. 1-4: «Ancipiti in bivio sum, nec quo potissimum vertar scio. Mira quidem sed brevis historia est. Hodierno die, hora fertne tertia, litere Senatus michi reddite sunt, in quibus obnixè admodum er multis persuasionibus ad percipiendam lauream poeticam Romam vocor. Eodem hoc ipso die circa horam decimam super eadem re ab illustri viro Roberto, Studii parisiensis cancellario, concive meo rnichique et rebus meis amicissimo, nuntius cum literis ad me venit: ille me exquisitissimis rationibus ut eam Parisius hortatur [...] tamen ut est animus iuvenum glorie appetentior quam virtutis, cur non ego —quoniam apud te familiariter gloriandi prestas audaciam— tam hoc michi gloriosum rear quam sibi olim potentissimus Affice regum Siphax, quod uno eodemque tempore duarum toto orbe maximarum urbium, Rome atque Carthaginis, in amicitiam vocaretur?».
- 24) Cfr. Marozzi (2022: 19).
- 25) Cfr. Wilkins (1951: 23).
- 26) Cfr. Albanese (2014: 1597-1600).
- 27) ロベル・アンジュー Robert Anjou 宛書簡。この書簡は1341年4月30日に書かれた。書簡が書かれた当時、ロベルはナポリ王であった。人文学を熱心に推奨したことから「賢明王」と称されていた。ペトラルカのローマでの戴冠の審査を行ったのもこの人物である。
- 28) *Fam.* 4. 7. 1-3: «ad hec et urbem Romam et obsoletum Capitolii palatium insperato gaudio et insuetis frondibus decorasti. 'Parva res', fortasse dixerit quispiam; sed profecto novitate conspicua et Populi Romani plausu ac iocunditate percelebris; lauree morem non intermissum modo tot seculis, ibi iam prorsus oblivioni traditum, aliis multum diversis curis ac studiis in republica vigentibus, nostra etate renovatum te duce, me milite. Scio quedam, et per Italiam et apud exterarum nationes, ingenia clarissima, que nichil ab hoe proposito nisi desuetudo longior et semper suspecta rerum novitas arcebat; ea deinceps, postquam in meo capite periculum fecere, brevi consecutura et romanas lauros certantibus studiis decerpitura, confido».
- 29) Cfr. 近藤 (1989: 17).
- 30) *Coll. laur.* 5. 2-5: «Dicet ergo aliquis: quid est hoc, amice? Nunquid morem, et nativa difficultate obsitum et iam pridem tractu temporis abolitum, renovare decrevisti, adversante presertim et repugnante fortuna? Unde tibi ista tanta fidutia ut novis et insuetis frondibus Capitolia Romana decorares? Nonne vides quanti negotii susceperis: scandere per ardua deserta Parnasi et inaccessum Musarum nemus?».
- 31) Cfr. Dotti (2014: 118).
- 32) *Coll. laur.* 6. 1: «Primum me pungit dum recolo quondam in hac eadem urbe Roma —«omnium aree terrarum», ut ait Cicero— in hoc ipso Capitolio Romano, ubi nunc insistimus, tot tantosque vates, ad culmen preclari magisterii provectos, emeritam lauream reportasse; nunc vero morem illum, non modo intermissum, sed obmissum, nec obmissum tantum, sed in miraculum esse conversum».
- 33) *BC.* X. 373-384: «Hinc michi primus honor, dulcis labor, otia Icta,/ Pastorumque favor multus, collesque per omnes/ Illiicet agnosci incipio digitoque notari./ Laurea cognomem tribuit michi, laurea famam,/ Laurea divitias; fueram qui pauper in arvis,/ Dives cram in silvis, nec me felicior alter./ Sed letum fortuna oculo suspexit iniquo:/ Forte aberam, silvasque ieram spectare vetustas:/ Pestifer hinc eurus, hinc humidus irruit auster;/ Ac, stratis late arboribus, mea gaudia laurum/ Extirpant franguntque truces, terreque cavernis/

Brachia ramorum, frondesque tulere comantes».

- 34) Pellegriniによると、当時伝染病は風に乗って広がると考えられていた。cfr. *BC.*, Pell., p. 196, nota 159.
- 35) *RVF.* 296: «Rotta è l'alta colonna e 'l verde lauro/ che facean ombra al mio stanco pensiero:/ perduto ò quel che ritrovar non spero/ dal borrea a l' austro, o dal mar indo al mauro.// Tolto m'ài, morte, il mio doppio tesoro/ che mi fea viver lieto e gire altero,/ e ristorar nol pò terra né impero,/ né gemma oriental né forza d'auro.// Ma se consentimento è di destino,/ che posso io piú se no aver l'alma trista,/ umidi gli occhi sempre, e 'l viso chino?// O nostra vita ch'è sí bella in vista,/ com' perde agevolmente in un matino/ quel che 'n molti anni a gran pena s'acquista»
- 36) Cfr. Feo(1975 : 119): «la morte del lauro vela anche troppo trasparentemente la dipartita di madonna Laura» (月桂樹の死は、貴婦人ラウラの死去を隠しつつもあまりに明白に伝えてしまっている)。
- 37) Santagataはこのソネットの執筆年代を、1348年から1350年の間としている。コロナの死の直後に書かれたかどうかは議論があるようだが、1348年のペストの後に書かれたことは確実である。cfr. *RVF.*, Sant., p. 1091.
- 38) 「月桂冠の喪失」というテーマは『カンツォニエーレ』においても頻出する。詳しくは林(2005 : 49-52)を参照されたい。
- 39) *BC.* X. 398-403: «Nulla quidem potius; lacrimosis parce querelis:/ Est dolor usque loquax, laurum non eurus et auster,/ Sed superi rapuere sacram, et felicibus arvis/ Inseruere Dei; pars corticis illa caduci/ Oppetijt, pars radices vivacior egit, /Elisiosque novo fecundat germine campos».
- 40) エーリュシオンとはギリシャ神話において、神々に祝福された人々が住む来世の桃源郷のこと。例えばウェルギリウス『アエネーイス』第六巻637行以降。なお、このエーリュシオンには、「月桂樹の森 lauri nemus」がある。cfr. *Aen.* VI. 658.
- 41) «solo il corpo di Laura è morto; ella vive nello splendore eterno»
- 42) *Secr.* I. 6. 1: «nec enim mirtus ulla nec hedera, denique dilecta, ut aiunt, Phebo laurea, quamvis ad hanc poetarum chorus omnis afficitur tuque ante alios, qui solus etatis tue contextam eius ex frondibus coronam gestare meruisti, gratior esse debet animo tuo, tandem aliquando in portum ex tam multis tempestatibus revertenti, quam ficus illius recordatio, per quam tibi correctionis et venie spes certa portenditur».
- 43) Cfr. *Aug. Conf.* VIII. 12. 28.
- 44) 『医者反駁』は1352年のペトラルカとクレメンス6世の侍医との間で行われた論争書のことである。ペトラルカはこの作品の中で、「詩の擁護者」として人文学の重要性を説いている。
- 45) *Inv. med.* III. 45: «Asinus magis est necessarius quam leo, gallina quam aquila: ergo nobiliores; ficulnea magis necessaria quam laurus, mola quam iaspis: ergo nobiliores».
- 46) Dotti(2002 : IX-X)によると、『わが秘密』が書かれたのは当初、1342年11月から1343年4月6日と長い間考えられていたが、H. BaronとF. Ricoが文献学的観点から新たな仮説を提示した。1353年の失われた写本から転写されたLaurenziano X X VI. n. 9の写本に1353年、1349年、1347年の文字が記入されていたのを発見したのである。この書き込みをもとに、多くの研究者はペトラルカの『わが秘密』の成立が三段階に分かれることを認め、現在、ほぼ全ての研究者がこれを受け入れている。
- 47) Feo(1975: 119): «la laurus è certamente allegoria della gloria poetica» (月桂樹は確かに詩的栄誉のアレゴリーである)。
- 48) Cfr. *RVF.* 1. 9-11: «Ma ben veggio or si come al popol tutto/ Favola fui gran tempo, onde sovente/ Di me medesimo meco mi vergogno» (今となってははっきりとわかっています。かつて、どれほどに長い間、私が民衆の話の種になっていたのかを。そうしてしばしば私は自分自身のことを恥じるのです)。
- 49) 『愛の凱旋』は『凱旋』と呼ばれる作品の一部である。詩形はテルツァ・リーマである。アレゴリーに満ちた作品で、夢が物語の枠を形成し、話が進んでゆく。執筆年代については未だ決着がついていない。
- 50) *TC.* IV. 79-81: «con costor colsi 'l glorioso ramo/ onde forse anzi tempo ornai le tempie/ in memoria di quella ch'io tanto amo»
- 51) ペトラルカの友人、ルードヴィーコ・デイ・ベリンゲン、愛称ソクラテス宛の書簡である。この書簡の中でペトラルカは多くの友人の死を嘆いている。
- 52) *Fam.* XIII. 7. 16-17: «vereorque ne frondes ille mee immaturis lauree ramis cupidius decerpente, quamvis dici soleant somnia vera facere, michi tamen et multis falsa fecerint insomnia et nocte concubia per autumnum eburneis emissa liminibus. Sed bene habet; ipse criminibus meis plector; nam et domi estuo et vix iam in publicum exire audeo».
- 53) Cfr. *Coll. laur.* 11. 13: «primo quod, adhibita dormienti, eius somma vera facit» [[月桂樹は] 何よりも第一に、

眠れる者の近くに置くとその者の夢を真実にします」。

54) Cfr. Verg. *Aen.* VI. 893-96.

55) 2.1にある『牧歌』第十歌 375 行目を参照されたい。

56) Cfr. *Sen.* V. 2. 64-68.

57) Cfr. *Sen.* V. 2. 50-52.

58) *Secr.* III. 7. 5: «Aut —ut omnium delirationum tuarum supremum culmen attingam et, quod paulo ante comminatus sum, peragam— quis digne satis excretur aut stupeat hanc alienate mentis insaniam cum, non minus nominis quam ipsius corporis splendore captus, quicquid illi consonum fuit incredibili vanitate coluisti? Quam ob causam tanto opere sive cesaream sive poeticam lauream, quod illa hoc nomine vocaretur, adamasti; ex eoque tempore sine lauri mentione vix ullum tibi carmen effluxit, non aliter quam si vel Penei gurgitis accola vel Cirrei verticis sacerdos existeres. Denique quia cesaream sperare fas non erat, lauream poeticam, quam studiorum tuorum tibi meritum promittebat, nichilo modestius quam dominam ipsam adamaveras concupisti; ad quam adipiscendam, quanquam alis ingenii subvectus, quanto tamen cum labore perveneris, tecum ipse recogitans perhorresces».

59) ペトラルカがボッカッチョに送った最後の書簡群に属する。この書簡はボッカッチョがペトラルカの老体を気にして、休むよう告げた書簡に対する返信である。ペトラルカは、この書簡の中でその生き方を、過去を回想しながら否定する。

60) *Sen.* XVII. 2. 105-109: «Laurea autem illa michi immaturo evi, fateor, atque animi, immaturis quidem texta frondibus, obtigit; quam si fuissem maturior, non optassem. Amant enim ut senes utilia, sic iuvenes speciosa, nec respiciunt finem. Et quid putas? Nil prorsus scientie, nil eloquende illa michi, invidie autem infinitum attulit et quietem abstulit; sic inanis glorie et iuvenilis audacie penas dedi. [...] Ad summam hoc michi mea laurea prestitit ut noscerer ac vexarer; sine qua, quod optimum vite genus quidam putant, et quiescere poteram et latere».

61) 例えば『韻文書簡集』第1巻 14「自分自身宛書簡」。

(東京大学人文社会系研究科修士)